

## フランス絶対王政期における男性のかつらと帽子

国際ファッション専門職大学  
平野 大

### 要旨

本稿のテーマはタイトルにもあるように、フランス絶対王政期における男性のかつらと帽子についてである。ルイ 14 世からルイ 16 世までの絶対王政期、男性のかつらや帽子のスタイルは時代により変化している。本稿では、そうした変化から浮かびあがってくるかつらと帽子の意味と役割について、当時のフランスの社会・政治状況をふまえてつ明らかにする。

本稿においては、まずタイトルにもある絶対王政期について検証する。というのも、この絶対王政の期間に関しては、さまざまな議論がなされており、本稿において、その期間を明確にする必要があったからである。つぎにフランスでの、かつらの普及と発展について考える。フランスでは、ルイ 13 世の頃にかつらが普及し始め、ルイ 14 世期に発展を遂げる。その過程をたどりながら、かつらが各時代において果たした役割について検証する。また当時の上流階級の人々の頭髪を彩った髪粉<sup>かみこ</sup>についても触れる。かつらの着用や髪粉の流行は、帽子のスタイルにも影響を与えていく。こうした影響下において登場した帽子が、トリコーンである。トリコーンは、かつらを着用する際には、小脇に抱えられることが多かった。本稿の最後には、当時の流行を伝える媒体でもあったモード版画集を参照しながら、ルイ 16 世期の帽子について検討する。

本研究を通じてルイ 14 世の時代、かつらは権威の象徴としての意味合いを持ち始めたことが明らかになってきた。ルイ 16 世の時代になると帽子のスタイルは多様化し始める。こうした絶対王政期の男性のかつらと帽子の在り方は、フランス革命期になるとオー・ドゥ・フォーム（フランス語でシルクハットの意）が普及していくことでその形を大きく変化させていく。

### キーワード

絶対王政、ルイ 14 世、ルイ 16 世、かつら、帽子

## 1 はじめに

本稿においては、ルイ 14 世（1638-1715）からルイ 16 世（1754-1793）にいたるフランス絶対王政期の男性のかつらと帽子について検討を加えていく。本検討を通じて王権の変化と男性のかつらや帽子にみられる嗜好との関わりについて、17 世紀から 18 世紀までのフランスの社会状況などもふまえて考察していく。

本稿の第 2 章以下の概要は、以下の通りである。

まず第 2 章では、フランス絶対王政期に

における男性のかつらと帽子についての先行研究、および必要な参考文献を概観する。第 3 章で筆者は、本稿のタイトルにもある「絶対王政」について、その期間とその語彙が示す意味を再確認していく。絶対王政の時期に関してはさまざまな議論がなされている。絶対王政期の男性のかつらと帽子を検証するうえで、本稿でも、この問題への言及は避けて通れない。第 4 章では、かつらについて述べる。かつらは、ルイ 13 世（1601-1643）の治世において、フランスの宮廷で広がりを見せ始める。それは、ルイ 14 世の時代にさらに発展を遂げる。次のルイ 15 世（1710-1774）

の統治下においても、かつらは男性のファッションアイテムとして重要な位置を占め続ける。また当時の頭髪を彩る重要な要素の髪粉についても述べていく。第5章で取り上げるのは、その当時流行した帽子、トリコーンについてである。トリコーンの流行はかつらの着用と密接な関わりがある。その関係性についても検証する。第6章においては、ルイ16世期の男性の帽子を取り扱う。この時代、帽子のスタイルは多様化する。この時代の帽子のスタイルを検証する際には、当時徐々に普及していったモード版画集を資料とする。モード版画集の登場は、その時代の流行の広がり大きな影響を与えた。モード版画集は、当時の流行の最先端を伝える媒体であったのだ。最後に、ルイ14世期にみられる権威主義的なかつらのスタイルからルイ

16世期の多様化する帽子への流れをふまえながら、絶対王政期における男性のかつらと帽子の意味合いについて考察していく。

本稿におけるルイ14世からルイ16世までの時代の流れを理解しやすくするため、本稿に関連する事項の年表(表1)を添えておく。

## 2 先行研究と参考文献

筆者は、長年、オー・ドゥ・フォーム<sup>1)</sup>の研究を重ねてきた[平野2010, 2012, 2014]。これらの研究では、オー・ドゥ・フォームの起源について考察を深めていった。また同時に、19世紀のフランス人男性のスタイルにおいて、オー・ドゥ・フォームがどのような役割を果たし、意味を持っていたかにつ

表1 本稿関連事項年表

1601年	ルイ13世誕生。
1610年	ルイ13世即位。
1629年頃	フランスにおいて、男性たちがかつらを着用し始める。
1634年	国務会議裁決により48の理髪師・風呂屋・蒸風呂屋、かつら師の職をつくることが決定。
1638年	ルイ14世誕生。
1643年	ルイ13世死去。
	ルイ14世即位。
1656年	ルイ14世、48の宮廷付き理髪師・かつら師の職をつくる。
1658年	ルイ14世、フランス北部のマルディクで重篤な病に侵される。
1660年頃	男性におけるかつらの流行。
1661年	ルイ14世親政開始。
1710年	ルイ15世誕生。
1715年	ルイ14世死去。
	ルイ15世即位。
	*ルイ15世期も男性はかつらをかぶり続ける。
1743年	ルイ15世親政開始。
1754年	ルイ16世誕生。
1774年	ルイ15世死去。
	ルイ16世即位。
	*ルイ16世期、帽子の形態は多様化していく。
1778年	モード版画集『ギャラリー・デ・モード』出版開始。
1787年	モード版画集『ギャラリー・デ・モード』出版終了。
1789年	バスティーユ襲撃によりフランス革命勃発。
1793年	ルイ16世死去。

いても考えていった。一連の研究において、オー・ドゥ・フォームの流行は、フランス革命におけるブルジョワ階級の台頭と密接な関係性を有しており、その形状、素材、色が重要な意味を持つことを明らかにした。実際、「オー・ドゥ・フォームは、シンプルでいかめしく堅実な印象を与えると同時に、その高さや光沢によって、権威と壮麗さをあらわすことができた」[平野 2010: 51]。こうしたオー・ドゥ・フォームのスタイルはまさに「自らのコスチュームに簡素さと厳格さを求める一方で、自らの威光を誇示したいという」[平野 2010: 51]、ブルジョワ階級の欲求に合致したものであった。これらの研究では、オー・ドゥ・フォームが広がりを見せ始めるフランス革命期を中心に検証を加えてきた。本稿では、絶対王政期にみられる男性のかつらと帽子に注目し、それらの変遷について検証しながら、フランス革命期、オー・ドゥ・フォームが存在感を示すまでの流れをたどっていく。

フランス絶対王政期における男性のかつらと帽子の変遷について考える際、フランスの服装の歴史に関する著作は、服とかつらと帽子の関係性を知るうえで重要な示唆を与えてくれる。『フランスの衣装 (le costume français)』[1996] は豊富な図版資料を用いながら、フランスの服飾史について詳細な説明を加えている。フランソワ・ブーシェによる『西洋における衣装の歴史 (Histoire du costume en Occident)』[1996] は、この分野における必読の書である。本書はフランスの服装の歴史をヨーロッパ全体の中に位置づけながら、詳述している。『18世紀の装い (Se vêtir au XVIII<sup>e</sup> siècle)』[1996] は、18世紀のフランスの装いについてさまざまな視点から考察を加えている研究書である。

ただこれらの著作では、フランス絶対王政期における男性のかつらや帽子の記述は限られたものとなっている。そのため本稿においては、かつらに関しては、ジャン＝バティス

ト・チエールの『かつらの歴史 (Histoire des perruques)』[1690] とド・ガルソーによる『かつら師の技法 (Art du perruquier)』[1767] を主たる資料としていく。チエールの著作は17世紀末、ド・ガルソーのそれは、18世紀後半に記されたものである。これらはフランスのかつらの歴史とその背景を考えるうえで貴重な知見を提供してくれる。

髪粉について考察する際には、18世紀末のパリの雰囲気を知るうえで重要な文献と考えられているルイ・セバスチャン・メルシエの『タブロー・ド・パリ 第1巻 (Tableau de Paris, Tome premier)』[1783] の記述を参照する。ルイ16世治世期の帽子については、当時徐々に普及し始めたモード版画集を軸に検証を進める。このモード版画集の中でもとくに重要な位置を占めるのが、『ギャラリー・デ・モード・エ・コスチューム・フランセ』<sup>2)</sup> (以下、『ギャラリー・デ・モード』) である。これは、1778年から1787年にかけて、エスノーとラピリー (Esnauts et Rapilly) によって出版されたモード版画集である<sup>3)</sup>。

### 3 絶対王政期について

絶対王政期の男性のかつらと帽子を検証する前に、まず、この絶対王政期が、いつの時代を指しているかという問いについて考えていきたい。しかし、この問いは、実はそれ程単純なものではない。というのも、この点に関して、現在、研究者間でもさまざまな議論が交わされているからである。そうした中、本稿では、絶対王政期の開始をルイ14世の治世からとする。またその終わりはルイ16世の処刑までとし、論を進めていく。

研究者間の見解の相違をふまれば、ルイ14世の統治を絶対王政の開始と結びつけながら、「ルイ十四世は最初の絶対君主だった」[ベルセ 2008: 79] と考えることは、議論の余地があることも付け加えておくべきである

う。実際、『真実のルイ 14 世——神話から歴史へ』[2008]の著者、イヴ＝マリー・ベルセは、それを「太陽王ルイ一四世にまつわる既成概念」[ベルセ 2008: 6]の一つととらえている。ベルセは、「たいていの歴史家たちは『絶対主義』出現の責任をルイ一四世に帰し、この統治形態の始まりを一六六一年の王によるクーデターに求めている」[ベルセ 2008: 79]としている。彼は、歴史家の間でもこの既成概念がある程度の支持を得ている<sup>4)</sup>ことを述べつつも、この考えに一定の留保をつけている。絶対王政とは、絶対主義による統治体制と一般的に考えられているが、ベルセはこの絶対主義に関して次のように述べている。

この絶対主義という名詞は一九世紀につくられた言葉で、一七八九年に君主ひとりだけが行使しているとされた権力を要約し、弾劾するために用いられた。この言葉は一般に「アンシアン・レジーム」と呼ばれる、フランス革命期に廃棄された価値観や諸原理の総体の政治版として認識され、選挙による議会に立脚した来たるべき体制と正反対のものとしてされた。[ベルセ 2008: 80]

ベルセは、絶対主義という言葉が 19 世紀につくられたものであるとし、フランス革命という時代状況によるバイアスに注意を喚起している。実際、ルイ 14 世の治世においても「王の権力はキリスト教の倫理によって制限され」、そして「人の法〔万民法〕によって制限されて」[ベルセ 2008: 80]いた。こうしたことからベルセは、絶対主義という言葉のイメージからルイ 14 世の統治体制を短絡的にとらえることをいさめている。

またこの絶対主義について考えていくうえで、フランス絶対主義の研究者、ファニー・コザンデとロベール・デシモンによる、『フランス絶対主義——歴史と史学史』[2021]

も有用な示唆を与えてくれる。この著作の中で、彼らはフランスにおける絶対主義および絶対王政の概念について先行研究を網羅しながら丁寧に考察を進めている。彼らは、そこで絶対主義について次のように述べている。

絶対主義という問題は、ルイ一一世<sup>5)</sup>とルイ一四世という二人の始祖の治世の間に、統治実践と理論実践を通して展開したように思われる。ルイ一一世は、絶対主義という体系の基礎を固め、ルイ一四世はこれを変容させ、その性格を変えた。[コザンデ&デシモン 2021: 243]

彼らのこの指摘も、「ルイ一四世は最初の絶対君主だった」とすることが既成概念に過ぎないというベルセの主張に通じるものがある。絶対主義をルイ 11 世とルイ 14 世という二人の王に帰すことで、彼らの絶対王政期のとらえ方は、より広いものとなっている。一方、フランスの歴史家のルネ・レモンドは、フランスの絶対王政の時期について、「フランスにおいては、もっぱら 17 世紀に、宰相のリシュリュー、ついでマザラン、そしてとりわけルイ 14 世の親政期に王権は絶対的となる」[Rémond 1974: 97]と述べている。レモンドの指摘では、王政の絶対化はルイ 14 世以前にすでに始まっていることとなる。それが完成するのが、ルイ 14 世の親政期なのだ。

このように絶対王政の時期については、研究者の間でも統一された見解がないのが現状である。本稿は、絶対王政の時期に関する精緻な歴史研究を主題とするわけではない。あくまでもフランスにおける男性のかつらと帽子の変遷を論じるものである。そのため本稿では、こうした絶対王政の難解な議論にはあえて深入りはしない。本稿の立場は、絶対王政からブルジョワ階級社会への体制の移行という観点から男性のかつらと帽子の変化をとらえるものである。そうした点をふまれば、



絶対王政期をルイ 14 世からルイ 16 世の統治下までの時期とし、フランス革命期との対比を際立たせることも一定の意味があるように思われる。実際、コザンデとデシモンも『フランス絶対主義』の「日本語版序文」の中で、絶対王政とルイ 14 世の統治を結びつけることに関しては、通説としつつも、以下のように述べている。

絶対王政の観念をルイ一四世の親政に結びつける通説は、あながち間違いではない。というのも、この国王は、桁外れの野心を持ってひとつの政治プロジェクトを構想したからである。軍事的栄光や行政機構の目覚ましい進歩、ヨーロッパ中が憧れるような芸術と文芸の発展といったこと以上に、ルイ一四世の治世は、王権を正当化する従来の伝統とは切斷された真の「王政文化」を作り上げた。[コザンデ&デシモン 2021: x]

彼らが述べているように、ルイ 14 世の統治下、「ヨーロッパ中が憧れるような芸術と文芸の発展」がみられたわけであるが、それはファッションの分野においても同様であった。実際、フランスにおいてファッションがとくに重要な意味を持ち始めるのもこのルイ 14 世の時代からである。本稿は、男性のファッション、とくにかつらと帽子をテーマとしており、その点からもこの「通説」に沿って、論を進めていくのが妥当と考える。

## 4 かつらの時代による変遷

### 4.1 ルイ 13 世期：かつらの普及

モナコに生まれ、フランスで活躍する歴史学者のジョルジュ・ヴィガレロは、かつらについて、美しさの概念の変化とその実相を豊富な歴史資料にもとづき描き出した『美人の歴史』[2012]の中で以下のように述べている。

個性化はさらに、技巧と戯れ、美しくなるための手順を変化させる。最初にその対象となるのは、頭部である。十八世紀、かつら師たちは、次のように主張する。つまり、われらかつら師は、各人のフォルムに合う、微妙な調整技術を習得しているのだ、と。かつら師の見解では、巻き毛と縮れ毛は、顔立ちにふさわしいものでなければならない。[ヴィガレロ 2012: 163]

ここに記されているように、かつらは当初より女性にとって美しくあるための重要なアイテムと考えられてきた。しかしこれからみていく中で明らかになっていくように、それは男性にとっても重要なファッションの要素の一つであったのだ。フランスにおいて、男性のかつらはルイ 13 世の時代から徐々に浸透していった。本稿の主要なテーマは、ルイ 14 世からルイ 16 世にいたるかつらと帽子の変遷であるが、以下においては、かつらが普及し始めるルイ 13 世の時代にも少し触れていく。

ルイ 13 世の統治期におけるかつらの普及に関して、『百科全書 (*Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*)』[1765]の「かつら師」の項目では以下のような記述がみられる。

過去のフランスにおいて、かつらの使用はまれであったため、かつら師たちは長い間、共同体を形成してこなかった。しかしその使用が広まってくるにつれて 1634 年 3 月 5 日および 4 月 11 日の国務会議裁決<sup>6)</sup> (*Arrêts du Conseil*) によって 48 もの、理髪師 - 風呂屋 - 蒸風呂屋、かつら師の職をつくること決定された。1673 年 3 月には、200 ものかつら師の親方の職がつくられており、こうしたかつら師の共同体は現在も存在する。[Diderot & d'Alembert 1765: 415]

ルイ 13 世はその必要性から国務会議裁決によって、かつら師の職をつくりだすことを決定した。決定の理由としては、フランスにおけるかつらの普及ということもあるが、もう一つ大きな理由があった。その理由については、『かつらの歴史』の著者、チエールの次の指摘が参考になる。彼は「ド・メズレー氏<sup>7)</sup>の証言によれば、ルイ 13 世は豊かな髪を再び取り戻した最初の私たちの王であり、彼の統治下の 1629 年ごろ、フランスにおいて、男性たちはまさにかつらをかぶり始めていった」〔Thiers 1690: 28〕と記している。「豊かな髪を再び取り戻した」というのは、つまり「病気により王の髪が失われ」〔Boucher 1996: 225〕、その対策としてかつらがつくられたということである。ルイ 13 世の失われた髪を取り戻す目的のために用いられたかつらは、徐々に男性の装いのアイテムとしても広がりを見せていく。ただ、「当初は頭全体を覆うものではなく、両側のみ、もしくは片方だけの使用であった」〔Thiers 1690: 28〕とチエールは述べている。

また、当時のかつらの着用者について、チエールは「最初に、かつらを着用したのは、宮廷人そして赤毛の人々、白癬を患った人々であった」〔Thiers 1690: 28〕としている。しかしかつら着用の理由はそれぞれ異なっており、その点についてチエールは「宮廷人は優雅さのために、赤毛の人々は虚栄心のために、白癬を患った人は必要から着用した」〔Thiers 1690: 28〕と述べている。

まず宮廷人については、「ルイ 13 世以前の王たちによる統治下、宮廷人は、無帽で宮廷生活をする中で、風邪や肺炎になることを恐れていたが、こうした恐怖から解放された」〔Thiers 1690: 28〕としている。ここで述べられている宮廷人の風邪や肺炎への恐れとは、どこから来ていたのであろうか。まずここで考えるべきことは、当時においては、暖房設備が現代のように整備されていなかったことである。そうした環境において室内で

も帽子をかぶらずにいると否が応でも体は冷えたであろう。風邪や肺炎にもかかる恐れがあった。この時代の医療・衛生環境を考えると風邪や肺炎に罹患することは、大変危険なことであったのは想像に難くない。

ではなぜ、こうした環境にもかかわらず、当時の宮廷人は宮廷で帽子を着用しなかったのか。その理由を読み解くカギは、当時の宮廷の礼儀作法にあると考えられる。宮廷において帽子の扱い、とくに着脱の作法は大変デリケートなものであった。たとえば、17 世紀、18 世紀のフランスの礼儀作法について詳細に記したアントワヌ・ド・クルタンによる『クルタンの礼儀作法書——十七、十八世紀フランス 紳士淑女の社交術』〔2017〕において、帽子の着脱に関して、以下のように記されている。

敬意を払うためには脱帽すること、ドアでは相手を先に通すこと、室内や食卓では上座を、屋外では道の右端、もしくは〔道路の両端の〕舗道を譲るといったことがそうだ。たとえ相手はるかに身分の低い者であったとしても挨拶にこたえる際に帽子を取らなければ、その人物はとても不作法で、育ちの悪い者と見られるであろうから、こうしたものごとも礼儀作法のまさに本質をなすのである。〔ド・クルタン 2017: 63〕

脱帽の仕草は敬意をあらわしていた。それは宮廷の礼儀作法において、重要な要素の一つであった。またド・クルタンは、同書の別の個所で、帽子の着脱の作法についてもう少し詳細に記している。

大広間や控えの間では、帽子を取るのが礼儀にかなっている。この点に関して、まず入室する者の側から室内にいる人びとに対して挨拶すべきという点に留意されたい。(中略) 目上の方に着帽するよ

うに言うのは礼儀作法に反している。反対に、自身が着帽している場合は、対等もしくは目下の者で、自分の家来でなくともあなたよりずっと目下で、彼らに言える立場にあるにもかかわらず、着帽するよう勧めないのも不適切である。(中略)自身が目下であれば、上述のように目上の人物に着帽するよう命じるのは控える、または自身が着帽するのは命じられてからにするといった配慮を十分にせねばならない。命じられた場合でも、その人物がたいへん高貴な方であれば丁重に遠慮することさえ求められる。ただし、三回も四回も相手に同じことを言わせないうち注意することも必要である。[ド・クルタン 2017: 67-68]

ここに記されていることがルイ 13 世の治世以前にも行われていたならば、宮廷につかえる者は、礼儀作法の制約から、結果的に宮廷内では帽子をかぶらずにいることが多くなっただけである。そうした無帽の状態では必然的に、体は冷えてしまう。しかし、かつらが普及することで、無帽の状態でも頭部の冷えをかつらによって、回避することが可能になったことは想像に難くない。このチエールの文章からは、かつらが当初、防寒具としても機能していた様子が推察されるが、あくまでも管見に過ぎず、この点に関しては、今後より詳細な検証が必要となってくるであろう。

つぎに、「赤毛の人々は虚栄心のために」かつらを着用したという文について考えていく。チエールは、これに関して、「赤毛の人々は、人々に嫌悪感を抱かせる彼らの髪の色を隠すためにかつらを着用した」[Thiers 1690: 29] と述べている。では、なぜ赤毛が人々に嫌悪感を抱かせたのか。それについてチエールは、「というのも、人々の言うところによれば、ユダは赤毛だったからである」[Thiers 1690: 29] と述べている。イエス・

キリストの弟子(12使徒)でイエスを裏切ったとされるユダと同じ赤毛の人々は、当時、自らの髪の色に対し、コンプレックスを抱いていたのだろう。このチエールの指摘からは、当時のフランス社会におけるユダに対する忌避感の強さが改めてうかがえる。それはキリスト教が当時の社会にしっかりと根を下ろしていた証でもある<sup>8)</sup>。また、「白癬を患った人は頭部の酷い患部を隠すため」[Thiers 1690: 29] にかつらを使用していた。

1767 年に出版されたド・ガルソーによる『かつら師の技法』においても、ルイ 13 世治世のかつらについての記述がみられる。ド・ガルソーも病気による抜け毛や体質による薄毛は当時においても悩ましい事柄であり、それに対処するためにかつらがあらわれてきたと述べている。

こうした悩ましい事柄を改善するためにルイ 13 世の治世初期に本物のようにみえるヘアピースをキャロット<sup>9)</sup>に取り付けることが考えられた。つぎに人々は機織り職人の手による目の細かい生地に髪を結び付けていった(中略)。この生地と髪とを組み合わせたものを並べてキャロットに縫い付けることによって、それはより薄く、より軽くなってきた。それを実現するためにカネピン(羊の表皮からつくられた上質な革)を使用し、顔に沿って襟にかかるよう髪を取り付けた。これは、当時、かつらと呼ばれた。[de Garsault 1767: iv]

このド・ガルソーの文章からも明らかのようにルイ 13 世の時代において、かつら制作の技術は徐々に確立されていく。ただその技術が洗練の域に達するのはルイ 14 世の時代においてである。

## 4.2 ルイ 14 世期：かつらの巨大化

本節では、ルイ 14 世期におけるかつらの

巨大化とそれが示すところのものについて検証していく。ルイ 14 世の時代に入りかつらの技術は、ますますその洗練の度合いを高めていく。この点についてド・ガルソーは、ルイ 14 世期のかつらについて次のように述べている。

編み毛へと向かいつつあったモデルを改良し、3本の絹糸上に髪を編み込む手法が開発された。これにより編み毛をリボンや布地に縫い付けながら調整し木型の頭部マネキンの上で、組み合わせていくことで、本物の髪の中の代わりに、ついに頭髪全体をかなり上手く複製することに成功した。この発明はとても素晴らしくて役に立ったため、1656年、偉大なる王、ルイ 14 世は、48もの宮廷付き理髪師・かつら師の職をつくった。同時に公衆に対する理髪師・かつら師の職を 200 ほどつくったが、これは実際に施行されることはなかった。結局、1673年にそれとは別に 200 もの職が創設されたがこちらは施行された。[de Garsault 1767: iv]

髪を絹糸への編み込みという手法が、かつら業界に革新をもたらした。ルイ 14 世もそのことを認識していたようであり、宮廷付き理髪師・かつら師の職がつくられていく<sup>10)</sup>。このあたりからフランスにおいて、男性のかつらが盛況をみせ始める。『フランスの衣装』においても、このかつらの状況について「1660年頃からの、かつらの改良が男性へのそれらの流行をもたらした。それらは巧妙さを競い合う理髪師・かつら師によってつくられた」[Ruppert, Delpierre, Davray-Piécolek & Gorguet-Ballesteros 1996: 118]と述べられている。この頃から、かつらはファッションアイテムとしての性質を持ち始めていく。ただ『西洋における衣装の歴史』の著者、ブーシェは、ルイ 13 世とは異なり、

ルイ 14 世自身はかつらの着用、当初それほど積極的でなかったとし、以下のように述べている。

とても美しい巻毛のルイ 14 世は長年、その巻毛を犠牲にすることを拒んでいった。そして、最初は彼の巻毛が通るような穴のついたかつらしか着用しなかった。しかし 1672 年には頭を剃らなければならないような人毛でできたかつらの着用を甘受した。[Boucher 1996: 225]

ブーシェによれば、美しい巻毛を有していたルイ 14 世は、ルイ 13 世のように髪のことでも思い悩んではおらず、かつらに頼る必要性を感じてはいなかったということらしい。しかし、ルイ 14 世の権力について表象・メディアの観点から分析を行ったピーター・バークはブーシェとは異なる見解を提示している。

一六五〇年代はじめから六〇年代まで、ルイー四世の視覚的なイメージは比較的すくなく、一六六〇年に、生えはじめの口ひげと短いかつらの大人になったばかりの青年として突如、登場することになった。そのかつらは、一六五八年の病気でルイが多くの髪を失ったことに対処するものとして説明されてきた。この時期にヨーロッパの貴族のあいだでかつらをかぶる習慣が広がりつつあったから、ルイがその流行に従ったのか、ルイがその流行を作り出したのかについて言うのは難しい。いずれにせよ、かつらのおかげで、王が必要としていた印象的な背の高さが可能になった。このとき以降、かつらなしに人前に出ることはなくなるだろう。[バーク 2004: 65]

バークは、ルイ 14 世もルイ 13 世と同じように、病気で多くの髪を失いかつらに頼ら



ざるを得なかったと指摘している。ブーシェとバークの主張は相反している。本稿では、どちらの見解に与すべきであろうか。その点について考えるうえで、参考となるのが16世紀から18世紀の身体と健康の歴史を専門とするスタニス・ペレーズによる指摘である。ルイ14世は、1658年の夏、フランス北部のマルディクで重篤な病に侵される。しかし王は、そこから奇跡的に回復する。ペレーズは、この点に関して、「瀕死状態とされていたルイ十四世はチフスによる熱病から自力で癒えたが、髪の毛は失った（まもなくかつらがその代役を果たす。男らしさが要求するのである）」[ペレーズ2016: 386]と述べている。

ペレーズの指摘をふまえると、バークの主張が正しいように思われる。ルイ14世は病気で失った髪の毛の代わりにかつらを使用した。かつらは彼の威厳を保つ一助となった。また前述のようにルイ14世統治下のフランスでかつら制作の技術は進歩しつつあり、その点もルイ14世のかつらの使用を後押ししたはずである。

さらに、かつらは、「王の公式のイメージと、王の日常的な現実とのあいだ」[バーク2004: 169]にある「厄介な不一致点」[バーク2004: 169]を埋める役割も果たしていた。バークは、次のように述べる。

たとえば、ルイは背が高くはなかった。かれの身長はおよそ一・六メートルぐらいしかなかった。かれの実際の背の高さとかれの「社会的高さ」と呼ばれるかもしれないようなものとの不一致は、さまざまなやり方でカムフラージュされなければならなかった。[バーク2004: 169]

そのカムフラージュの重要なアイテムの一つが大きなかつらであった。それは、「ルイ一四世に堂々とした印象をあたえる助けと

なった」[バーク2004: 169]<sup>11)</sup>。ドイツの文化史家、マックス・フォン・ベーンも、ルイ14世時代のかつらについて、「ルイ十四世が活着している間は、大きなアロンジュかつらが使われていた。頭上にそびえ、うしろは腰までさがる髪は威厳にみちて見えた」[フォン・ベーン2000: 199]と述べている。こうしたかつらに関して『フランスの衣装』でも、「かつらはとても重くなってしまい、しばしば1キロを超えるほどの重さの髪を着用するため頭を剃っていた」[Ruppert, Delpierre, Davray-Piékoek & Gorguet-Ballesteros 1996: 118]と述べられている。この時点において、かつらは、病気による抜け毛や体質による薄毛を隠すためのものから、着用者の権威や権力をあらわす象徴的意味を持ち始める。それをもっともよくあらわしていたのがルイ14世のかつらである。

### 4.3 ルイ15世期：かつらと男性の髪型の多様化

では、このかつらは、その後どのようになっていったのであろうか。ブーシェによれば、かつらの巨大化がおさまるのは17世紀末においてということであった[Boucher 1996: 225]。その後、18世紀のかつらの状況について、18世紀フランスの服飾様式の専門家、マドレーヌ・デルピエールは以下のように述べている。

摂政時代〔筆者注：オルレアン公フィリップによる1715年から1723年にかけての摂政期間を指す〕、そしてルイ15世の親政時代においても、男性はかつらをかぶり続けた。ルイ14世時代のかつらは1730年ごろまで、年配者またはそうしたかつらがエンブレムとなったいくつかの自由業の執務において、なおかぶられていた。[Delpierre 1996: 53]

デルピエールの文章から、かつらはルイ

15世の時代においてもかぶられ続けたものの、その形態はルイ14世の時代から変化していたことがうかがえる。男性の髪型にも流行があった。それは、時代によりさまざまな形を取る。フォン・ペーンもルイ15世期の髪型事情について以下のように述べている。

若きルイ十五世は特に美しい長い髪をしていたので、かつらは不用だった。臣下は王の髪型をまねる。うしろにたれた長い髪を人々は幅広い黒リボンでたばねて袋に入れた。前は額髪と両の耳の上にかぶさる捲毛とに分かれた。[フォン・ペーン 2000: 199]

ルイ13世もルイ14世も病気により、かつらの着用を余儀なくされた。しかし、ルイ15世にはその必要はなかった。ただフォン・ペーンが描く、ルイ15世のような髪型は誰にでもできたわけでもなかった。その点についても、フォン・ペーンは、以下のように述べている。

紳士のすべてが流行の髪型に結えるほど十分に自前の髪を持っているわけではないので、十八世紀にもかつらがむしろふつうで、自前の髪は例外といっても誇張ではなかった。それにかつらの方が生えている髪よりも、ファンタジーをたくましくすることができる。[フォン・ペーン 2000: 200-201]

実際、かつらを使用することで、髪型のヴァリエーションはより多様化していく。ルイ15世の時代、フォン・ペーンが指摘するように「かつらはあらゆる階級のためにあったし、あらゆる機会のためにもあった」[フォン・ペーン 2000: 201] こともあり、かつらは男性の装いにおいて、欠かすことのできない要素の一つとなっていく。

#### 4.4 髪粉

かつらとともに当時のファッションを考えるうえで重要となってくるのが髪粉である。髪粉について、フォン・ペーンは次のように述べている。

自前の髪であろうとかつらであろうと、ともに髪粉が必要だった。髪粉なしにロココは考えられない。大きなアロンジュかつらははじめ人毛の自然色だったが、最も好まれたのはブロンドだった。しかし人毛の供給量には限度があるので日用品の本性を隠すために、髪粉が用いられるようになった。[フォン・ペーン 2000: 202]

ブロンドの髪色を演出するため髪粉は上流階級のおしゃれに必要なアイテムであった。こうした上流階級における、髪粉の重要性は、メルシエの『タブロー・ド・パリ』にも垣間みえる。本書の訳者でフランス文学者の原宏は、『タブロー・ド・パリ』[1989]の「訳者まえがき」において、「大革命前夜、ブルボン王朝最後の十数年の栄華を背景にして書かれ、出版されたのが」[原 1989: 5]、本書であるとしている。本書は、さらに18世紀のパリの様子を生き生きと描写している。原宏も「彼の文章は、十八世紀のパリおよびフランス社会を記録した貴重な資料として、歴史家によって盛んに引用されている」[原 1989: 5-6]と述べている。本稿においてもメルシエの文章を検証しながら18世紀パリの髪粉事情を振り返っていく。

メルシエは当時のおしゃれの必須の要素である髪粉が抱える問題について、鋭い指摘を行っている。

店の使用人、検事や公証人の見習い、召使、料理人、見習いコックなど、すべてが彼らの頭に大量の粉をふりかける。皆がそれによって尖った髪の房、重なり

合った巻毛を整える。エレガントに身繕いした洒落物と同様に近所の店でも龍涎香で香りを付けた粉やエキスの香りがあるのをとらえる。(中略) 20万人もの人々の髪を白くする髪粉は貧しい人々の食料から割かれており、法律屋の大きなかつら、洒落物のラ・ヴェルジェット (la vergette<sup>12)</sup>)、軍隊の士官の巻毛、街の徘徊者のとても大きなカトガン〔筆者注：18世紀に流行したリボンでうなじに束ねた髪形〕の中の小麦粉は、1万人の気の毒な人々を養えるであろう。栄養がある部分を取り去った小麦から抽出されたこの物質が、そうした人々ではなく、空しくも多くの暇人の襟首の上へと向けられると考えるとき、人は自分の生まれつきの自然な色を髪に残しておかないこの使用法を嘆くのだ。〔Mercier 1783: 82-83〕

髪粉は小麦粉からつくられていた。小麦粉は本来なら食用となるべきものである。それをあえて当時は、一部の人々のファッションのために使用していたのだ。そのことにより、飢えに苦しむ層が生み出されていった。ブロードでありたいという一部の人間のいびつな欲望が、多くの人々に苦しい生活を強いることとなったのだ。18世紀においても、資源の浪費は大きな問題であったことが、メルシエの文章からは理解できる。

このようにかつらと髪粉が男性のファッションにおいて存在感を強めていったことが、男性の帽子の在り方にも影響を与えていく。次章ではこの影響について検討する。

## 5 かつらとトリコーン

かつらの着用が上流階級の男性の間でファッションとして定着していく中で、帽子の形にも変化があらわれてくる。この帽子の形の変化について、『西洋における衣装の歴

史』では、以下のように述べられている。

ルイ 14 世の時代、かつらの使用は帽子を不必要なアクセサリとする。貴族は、帽子をかぶることは大変稀であったが、礼儀作法としてそれをぴったり小脇に抱えていなければならなかった。それゆえクラウン〔筆者注：帽子の頭部〕の高さが低くなり、帽子の大きなブリム〔筆者注：帽子のつば〕は前と後ろに反り返っていく。〔Boucher 1996: 225〕

かつらが存在感を増すことで、帽子の着用が減っていく。しかし、前出の『クルタンの礼儀作法書』にもあるように、帽子自体は、貴族社会において必要不可欠なアイテムであった。かつらの巨大化によって帽子の着用が難しくなったとしても、礼儀作法の観点からは、その携帯は必要なことであったのだ。こうして帽子はかぶるものから、小脇に抱えるものへと変化した。また小脇に抱えるという必要性から帽子の形態も、それに対応していった。デルピエールもこの点について以下のように述べている。

かつらの使用は、帽子の着用には有利には働かず、それはむしろ携帯されて、シャポー・ドゥ・ブラ (chapeau de bras : 腕の帽子) となる。この名前が示すように帽子は頭にかぶられるよりも小脇に抱えられることが多かった。〔Delpierre 1996: 53〕

このシャポー・ドゥ・ブラはトリコーン (le tricorne) ともいわれる。トリコーンとは三角帽という意味である。これは、先端、突出部、角という意味の“corne”という男性名詞に、3つのという意味の接頭語“tri”が付け加わってできた言葉である。このトリコーンについて、『フランスの衣装』では、次のように述べている。

典型的な帽子としては《ランピオン<sup>13)</sup>》ともいわれるトリコーンがある。その帽子のブリムは、しばしば飾り紐が施され、ある時は、反り返り、またある時は、傾いている。トリコーンのサイズはさまざまである。しかし、普通は、平たく小さい形をしている。というのもそれはほとんど使用されないからだ。かつらのせいで、多くの場合それは、小脇に抱えられている。[Ruppert, Delpierre, Davray-Piékoklek & Gorguet-Ballesteros 1996: 147]

ルイ 14 世の時代、かつらは巨大化し、着用者の威厳を示すための重要なアイテムとなった。それにともない、帽子は小型化していく。それは、かぶるものから携帯するものへと変化する。威厳を保つためのかつらと礼儀作法のための携帯用の帽子、これらはまさに宮廷を中心とした王政を象徴するスタイルといえまいか。しかし、ルイ 15 世時代の男性のかつらと髪型が多様化する段階を経て、ルイ 16 世治世下においては、帽子は携帯するものから、着用するものへと再び変わっていく。それにより、その形態のヴァリエーションも増加していく。次章においてはルイ 16 世治世、フランス革命直前のスタイルを当時のモード版画集を参照しながら検証する。

## 6 『ギャラリー・デ・モード』にみるルイ 16 世期の帽子

本章では、1778 年から 1787 年にかけて、エスノーとラピリーによって出版されたモード版画集『ギャラリー・デ・モード』にみられる男性の帽子について紹介していく。この『ギャラリー・デ・モード』について、フランスモード版画研究家のレイモンド・ゴドリオ (Raymond Gaudriault) は、『フランスモード版画目録——その誕生から一八一五年まで (Répertoire de la gravure de mode fran-

çaise des origines à 1815)』[1988]の中で、このモード版画集を、「間違いなく、もっとも美しいフランスモード版画の一つである」[Gaudriault 1988: 146]と評している。以下においては、『ギャラリー・デ・モード』にあらわれた男性の帽子をいくつか紹介しながら、ルイ 16 世期の帽子について考える。

最初に、帽子を小脇に抱えるスタイルのブルジョワ男性を描いた図 1 の版画を見てみよう。この版画の男性についての解説文は以下のようなものである。

巻毛を乱さないために、小脇にシャポー・ブリゼ (chapeau brisé: 折り畳み式帽子) を抱えるスタイルにも注目してみよう。このスタイルは大変な進化を遂げ、イミテーションの帽子や厚紙を黒いタフタで覆い、三角の形にし、折り畳み式帽子にすることが考案された。[Cornu 1912]



図 1 La Galerie des modes et costumes français, pl.71 (ギャラリー・デ・モード 図 71)  
Chapeau brisé / 折り畳み式帽子

シャポー・ブリゼのブリゼ (brisé) は、形容詞である。これには壊れた、破れた、折れた、くたくたの、という意味や、ジグザグの、



折り畳み式の、という意味がある。ここでは、文脈から折り畳み式帽子とするのが良いように思われる。この解説文からは、18世紀末においても髪型を乱さないためにあえて帽子をかぶらないスタイルが存続していたことがわかる。さらに、この時代には帽子をより持ちやすくするため、トリコーンに横した折り畳み式の帽子まで考案されていた。

その一方で、『ギャラリー・デ・モード』には、このトリコーンを想起させる帽子を着用した人物の版画もいくつかみることができる。図2の版画に描かれている男性がかぶっているのが、その一つである。それは、シャポー・アラ・スイス (chapeau à la Suisse : スイス風の帽子) と呼ばれる帽子である。この帽子は両端に2つの角を持ち、帽子の正面にも少し角がせりでている。



図2 La Galerie des modes et costumes français, pl.76 (ギャラリー・デ・モード 図76)  
Chapeau à la Suisse / スイス風の帽子

図3の版画の上部に描かれているのが、シャポー・ア・ランドロスマン (chapeau à l'Androsman) である。こちらも、トリコーンを思わせる。その形は高さがより強調されている。これらの帽子はその形状からも着用

を目的としたものであることがうかがえる。



図3 La Galerie des modes et costumes français, pl.263 (ギャラリー・デ・モード 図263)  
Chapeau à l'Androsman /  
シャポー・ア・ランドロスマン (上)  
Chapeau rabatu avec une cocarde à la Jokei /  
ブリムの両端が垂れた、リボンの花結びの飾りつ  
いたジョッキー風の帽子 (左下)  
Chapeau à la Quaker / ケーカー風の帽子 (右下)



図4 La Galerie des modes et costumes français, pl.69 (ギャラリー・デ・モード 図69)  
Chapeau à la Valaques / バラック風の帽子

また『ギャラリー・デ・モード』には、クラウンとブリムで構成された帽子もみられる。図4の版画の男性がかぶっているのがシャポー・ア・ラ・バラック (chapeau à la Valaque : バラック<sup>14)</sup> 風の帽子) またはシャポー・オン・クラボー (chapeau en clabeau<sup>15)</sup>) と呼ばれる帽子である。この帽子は、クラウンが低目で、ブリムの後ろ側が反り返っているのが特徴である。

図5の版画の男性がかぶっている帽子はシャポー・ア・ラ・ペンシルヴェニア (chapeau à la Pensilvanie : ペンシルヴェニア風の帽子) である。この帽子のクラウンも低く、ブリムは両側が少し反り返っている。また、前出の図3の版画において、向かって右側に描かれているのがシャポー・ア・ラ・クェーカー (chapeau à la Quaker : クェーカー風の帽子) である。この帽子のクラウンは円筒形で、ブリムの幅は広い。「ペンシルヴェニアはクェーカー教徒のウィリアム・ペンによって拓かれ、英国国教会の迫害から逃れようとした多くのクェーカー教徒が植民した土地であった」[平野 2012: 47] ことをふまえると、シャポー・

ア・ラ・ペンシルヴェニアもシャポー・ア・ラ・クェーカーと同様にクェーカー教と何らかの関係性を持つ帽子と考えられる。

同じくこの図3の版画において、シャポー・ア・ラ・クェーカーの横に描かれているのがブリムの両端が垂れたりボンの花結びの飾りのついたジョッキー風の帽子 (chapeau rabatu avec une cocarde à la Jokei) である。このジョッキー風の帽子は、図6の版画の男性もかぶっている。ジョッキーとは、競馬騎手のことを指す。当時のフランスではイギリス由来の競馬が流行しており、それにともない乗馬もフランスの上流階級で広まり始める [平野 2010: 47]。これらの流行は、フランスにおける「アングロマニー (イギリス趣味) と呼ばれる現象の一側面であった」 [平野 2010: 47]。また図7の版画の男性がかぶっているのがシャポー・オングレ・ア・オート・フォーム (chapeau anglais à haute forme : 高いフォルムの英国風の帽子) である。シャポー・ア・ラ・ジョッキーはその由来から、シャポー・オングレ・ア・オート・フォームはその名前から、どちらもイギリス



図5 La Galerie des modes et costumes français, pl.155 (ギャラリー・デ・モード 図155) Chapeau à la Pensilvanie / ペンシルヴェニア風の帽子



図6 La Galerie des modes et costumes français, pl.282 (ギャラリー・デ・モード 図282) Chapeau Jockey / ジョッキー風の帽子

起源である可能性が高い [平野 2010: 49]。



図 7 La Galerie des modes et costumes français, pl.256 (ギャラリー・デ・モード 図 256)  
Chapeau anglais à haute forme /  
高いフォルムの英国風の帽子

シャポー・ア・ラ・ペンシルヴェニア、シャポー・ア・ラ・キューカー、シャポー・ア・ラ・ジョッキー、シャポー・オングレ・ア・オート・フォームなどは、その形状からすべてフランス革命期にあらわれたオー・ドゥ・フォームの原型と考えられる。ルイ 16 世期においては、ルイ 14 世の頃からの帽子を携帯するスタイルやトリコーンを思わせる帽子、オー・ドゥ・フォームの原型となる帽子などがみられる。ルイ 16 世の頃には、帽子も多様化するのだ。しかし、フランス革命が勃発し、革命が進むにつれて、上流階級の帽子はオー・ドゥ・フォームへと収斂されていく。

## 7 おわりに

本稿においては、絶対王政期の男性のかつらと帽子の関係性を探りながら、ルイ 14 世からルイ 16 世までの時代の変化におけるそれらの在り方について検証していった。そこ

から見えてきたことは、絶対王政期において、かつらが重要な意味を持っていたことである。とくにルイ 14 世の治世、かつらは権威の象徴として、その大きさを競い合っていくようになる。このかつらの巨大化にともない、帽子はかぶるものから携帯するものへとその役割を変えていく。18 世紀末になると『ギャラリー・デ・モード』の版画にもみられるように、携帯用の帽子は折り畳み式となり、小脇に抱えることが、より容易になる。その一方で、着用を前提とした帽子も数多くあらわれてくる。その中でも注目に値するのは、フランス革命後の上流階級の帽子として定着するオー・ドゥ・フォームの原型と考えられる帽子の台頭である。

ルイ 14 世時代の権威主義的なかつらのスタイルからルイ 16 世時代の多様な帽子のスタイルへの流れは、ルイ 14 世によって確立された絶対王政の権威がルイ 16 世の統治下において、徐々に弱まっていったことと符合するのではなからうか。またフランス革命後、ブルジョワ階級が力を握り始めると、彼らの象徴であるオー・ドゥ・フォームが男性の帽子において幅を利かせるようになってくる。貴族的な権威を示威的にあらわすかつらから、堅実さと威光の誇示というブルジョワ階級のアンビバレントな欲求をあらわすオー・ドゥ・フォームへと男性の頭部のスタイルは変化していく。

本稿では、絶対王政期における男性のかつらと帽子の意味と役割について一定程度まで明らかにできたように思われる。しかし、まだまだ、研究し尽くせていない課題も存在する。まず、第 4 章の第 4 節で取り扱った髪粉についてであるが、本稿では導入的記述にとどまっているので、今後はより詳細な検証を行っていきたい。また、ルイ 16 世時代の帽子、とくにトリコーンを想起させる帽子についても深く考察できなかったので、今後はこの点についてもさらなる研究を行ってきたい。



付記：本稿の執筆においては、FABの査読の先生方から大変貴重なご指摘をいただいた。心より感謝の意を申し上げる次第である。

〈注〉

1) オー・ドゥ・フォーム (haut-de-forme) とは、フランス語でシルクハットを意味する言葉である。オー・ドゥ・フォームは、フランス語で「フォーム (形態) の高さ」という意味となる。対してシルクハットの意味は、「絹帽」である。フランス語のオー・ドゥ・フォームは、その帽子の形状をあらわし、対して、英語のシルクハットは材質をあらわしている。

2) 『ギャラリー・デ・モード』の正式なタイトルは以下のとおりである：*Galerie des modes et costumes français dessinés d'après nature, gravés par les plus célèbres artistes en ce genre, et colorés avec le plus grand soin par Madame Le Beau. Ouvrage commencé en l'année 1778.*

3) 『ギャラリー・デ・モード』はフランス革命前のフランスのファッションを研究するうえで欠かすことのできない資料である。『ギャラリー・デ・モード』の実物は各地の図書館に点在している〔西浦 2001: 1099〕。そうした状況の中、本稿では、パリ市立コスチューム・モード美術館 (Musée de la Mode de la Ville de Paris) 所蔵の20世紀初頭に複製されたレヴィ版〔Cornu 1912〕を使用する。これはエミール・レヴィにより出版され、ポール・コルニュにより前書きが付せられたものである。このレヴィ版も複製であるが大変貴重な資料である。本稿に掲載している『ギャラリー・デ・モード』の画像は筆者がパリ市立コスチューム・モード美術館で研修を行っていた際に、許可を得て撮影したものである。

4) 『フランス史』〔2019〕の著者、ギヨーム・ド・ベルティエ・ド・ソヴィニーは、ルイ14世の統治期について「ルイ十四世はこ

の時代、さらには西洋史全体に対しても、絶対君主の原型を示している」〔ド・ソヴィニー 2019: 253〕と述べ、ルイ14世が最初の絶対君主であるという立場をとっている。ただ彼は、同時にフランソワ1世 (1494-1547) が即位した1515年頃から絶対王政の素地がつくられ始めたとも考えている〔ド・ソヴィニー 2019: 182-186〕。

アンシアン・レジームの歴史を専門とするベルナル・ヴォングリは、ルイ14世が言ったとされる「朕は国家なり」という言葉に注目する。この言葉は絶対王政について考えるうえで重要な意味を持つ。ヴォングリは、この言葉に関する思索を深め、ルイ14世と国家について以下のように述べている。

王は、それゆえまさに、国家であった。そして、ルイ14世がその言葉を言ったかどうかは重要なことではなかった。というのも彼は常にそのように行動してきたからだ。こうした考えは、17世紀において一般に流布していただけでなく、いやむしろ王政の名を正当化し、まさにその中心部においても同様に広まっていた。というのも彼の前任者たち以上に、太陽王はドクトリンによって彼の権力に課せられた原則の限界のすべてを乗り越えていったからだ。彼はこうして、冗語法的に、いわゆる「絶対的」王政を開始していった。それは、浮沈を伴いつつ、彼の二人の継承者、カリスマ性の欠如と彼らの善意の犠牲となった王たちにより継承され、機能させられていく。〔Vonglis 2006: 133〕

ヴォングリは、このようにルイ14世が国家をあらわしていたとし、絶対王政の起源を彼に求めている。

5) ド・ソヴィニーは、ルイ11世 (1423-1483) について「経済的現実に敏感であった初めての近代的君主であった」〔ド・ソヴィ



ニー 2019: 148] と述べている。

6) フランス絶対王政期を専門とする研究者、林田伸一は、国務会議裁決について、「伝統的な王令とは異なり、制限王政の理念を主張する高等法院の掣肘を免れているという性質をもっていた」[林田 2011: 1] と述べている。

7) フランソワ・ウード・ド・メズレー (François Eudes de Mézeray, 1610-1683)。フランスの歴史家。ルイ 14 世の公的史料編纂官。アカデミー・フランセーズのメンバー。

8) フランスのアンシアン・レジームの専門家、ユベール・メチヴィエは、当時の社会とキリスト教の関わりについて以下のように述べている。

精神的にみて本質的なことは、洗礼から臨終の秘蹟にいたるまで、フランス人の生活におけるキリスト教的機構が強力なことである。これはルイ十三世時代の根強い《カトリック復興》——十七世紀をして聖者の世紀たらしめた——によって強化され、再生させられた。[メチヴィエ 1955: 25]

こうした社会背景がユダを想起させる赤毛を忌避させたのであろう。

9) キャロット (la calotte) とは、帽子の山の部分を指し、クラウンとも呼ばれる部分である。半球形の形をしている。また帽子のつばは、ボール (le bord) とフランス語で呼ばれる。英語ではブリムとも言う。

10) モーリス・オメーは彼の博士論文『アンシアン・レジーム期の売官制 (*De La Vénalité Des Offices: Sous L'Ancien Régime*)』[1903]において、「ルイ 14 世治世下の売官制度の本質は、官吏の雇用の一方法ではなく、貨幣を生み出す方法であった」[Homais 1903: 57] と述べている。こうしてルイ 14 世の時代において、あらゆる職が売買されていく。オメーは売買された職を以下の 5 つに分類

している。

1. 裁判所補助吏の職と領地の水源や森林に関する職
2. 軍隊に関する職
3. 産業や工業に関する職
4. 市町村に関する職
5. 財務や法務に関する職 [Homais 1903: 59]

上記の 5 分類の内、本稿と深く関わるのは、「3. 産業や工業に関する職」である。オメーはさらにこれを 3 つに分類している。

1. まず、取引に関わるものとしてつくられた職がある。その資格保有者は、買い手と売り手に、同時に影響力を行使する。バター・チーズ検査試食官、豚の販売検査官、家禽卸売人検査官などが例として挙げられる。
2. つぎに、少なくとも国璽の印がなされた書状を所持していなければ業務を行う権利がない官職としての職がある。こうした職としては荷造り人、両替商、清涼飲料水販売業者、かつら師などが挙げられる。
3. 最後に、製作所や工芸業界は国庫に多大なる資金をもたらすことを主たる役割とする、官職とされる職務の検査官により課税される。[Homais 1903: 74-75]

本稿で取り上げているかつら師も 2 つ目の分類の中に登場している。

11) ルイ 14 世の侍医たちの手による『1647 年から 1711 年のルイ 14 世の健康日記 (*Journal de la santé du roi Louis XIV de l'année 1647 à l'année 1711*)』[1862] の中にもルイ 14 世のかつらに関する記述がみられる。

幾人かの人が思っているように、王のかつらの下には、髪の毛はない。ルイ14世は、多くのかつらを保有していた。というのも彼が居住するスペース、狩りに行く時や、外国の大使と謁見する場合に応じてさまざまな大きさのかつらに変えたり、それをかぶったりする習慣があったからである。[Vallot & d'Aquin & Fagon 1862: 261]

この侍医たちの記述からは、ルイ14世が状況に応じて、かつらを選び着用していた様子がうかがえる。この記述からもルイ14世にとって、かつらが自己演出のための重要なアイテムであることが理解できるであろう。

12) ラ・ヴェルジェット (la vergette) は、服や生地を手入れするためのブラシであり、髪型を指す場合は、ブラシのようにかなり短く刈られた髪のことを指す。

13) 《Lampion》とは chapeau lampion の短縮形。この lampion はフランス語の男性形で提灯やランプ（油皿に燈心だけが入ったもの）、燭台、燈明という意味である。しかし実際には、chapeau lampion という言葉は chapeau à lampon が間違っただけのものである。この lampon は男性形で、金や銀、銅でできたボタンまたはホックのことを指し、帽子、とくにトリコーンのへりを反り返らすのに使用される。

14) Valaque とは、フランス語でルーマニア南部のワラキア地方を指す。

15) clabeau という語の意味について、現在のところ把握できておらず、今後の研究課題となっている。

#### 〈参照文献〉

- ヴィガレロ、ジョルジュ 2012 『美人の歴史』 後平 滯子訳、藤原書店。  
 コザンデ、ファニー&ロベール・デシモン 2021 『フランス絶対主義——歴史と史学史』 フランス絶対主義研究会訳、岩波書店。  
 ド・クルタン、アントワーヌ 2017 『クルタンの礼

儀作法書——十七、十八世紀フランス 紳士淑女の社交術』 増田都希訳、作品社。

ド・ソヴィニー、ギヨーム・ド・ベルティエ 2019 『フランス史』 鹿島茂監訳、楠瀬正浩訳、講談社選書メチエ。

西浦麻美子 2001 『『ギャラリー・デ・モード』にみる服飾——略装モードとイギリス趣味』 『日本家政学会誌』 52(11): 1099-1106。

バーク、ピーター 2004 『ルイ14世——作られる太陽王』 石井三記訳、名古屋大学出版会。

林田伸一 2011 「フランス絶対王政期における国務会議裁決と行政の技術」 『成城文藝』 214: 1-19。

原宏 1989 「訳者まえがき」 ルイ=セバスチャン・メルシエ 1989 『十八世紀パリ生活誌 上: タブロー・ド・パリ』 原宏編訳、岩波書店、pp. 5-6。

平野大 2010 「フランスにおけるオー・ドゥ・フォーム（シルクハット）の形成過程に関する序説」 『服飾美学』 50: 39-56。

平野大 2012 「オー・ドゥ・フォームの形成過程におけるキューカー教徒の帽子の役割と意味」 『服飾美学』 55: 37-54。

平野大 2014 「ダヴィッドの《セリジア氏の肖像画》における服飾表現と花形徽章」 『美学芸術学』 30: 19-37。

フォン・ベーン、マックス 2000 『ロココの世界——十八世紀のフランス』 飯塚信雄訳、三修社。

バルセ、イヴ=マリ 2008 『真実のルイ14世——神話から歴史へ』 阿河雄二郎・嶋中博章・滝澤聡子訳、昭和堂。

ペレーズ、スタニス 2016 「ルイ十四世もしくは絶対的男らしさ？」 ジョルジュ・ヴィガレロ編 『男らしさの歴史 I 男らしさの創出——古代から啓蒙時代まで』 鷲見洋一監訳、片木智年訳、藤原書店、pp. 371-415。

メチヴィエ、ユベール 1955 『ルイ十四世』 前川貞次郎訳、白水社。

Boucher, François 1996 *Histoire du costume en Occident*. Paris: Flammarion.

Cornu, Paul ed. 1912 *Galerie des modes et costumes français, dessinés d'après nature, 1778-1787; réimpression accompagnée d'une préface par M. Paul Cornu*. Paris: Emile Lévy.

de Garsault, François Alexandre Pierre 1767 *Art du perruquier, contenant la façon de la barbe; la coupe des cheveux; la construction des perruques d'hommes et de femmes; le perruquier en vieux, et le baigneur étuviste*. Paris: Desaint & Saillant.

Delpierre, Madeleine 1996 *Se vêtir au XVIII<sup>e</sup> siècle*. Paris: Société Nouvelle Adam Biro.

Diderot, Denis, Jean Le Rond d'Alembert 1765 *Ency-*

- clopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers Volume 12.* Paris: Briasson, David l'ainé, Le Breton et Durand.
- Gaudriault, Raymond 1988 *Répertoire de la gravure de mode française des origines à 1815.* Nantes: Promodis, Editions du Cercle de la Librairie.
- Homais, Maurice 1903 *De La Vénalité Des Offices : Sous L'Ancien Régime.* Paris: L. Larose et Forcel.
- Mercier, Louis Sébastien 1783 *Tableau de Paris, Tome premier.* Nyon (Suisse): l'Imprimerie de Natthey & Compagnie.
- Rémond, René 1974 *Introduction à l'histoire de notre temps 1 -- L'Ancien Régime et la Révolution 1750-1815.* Paris: Editions du Seuil.
- Ruppert, Jacques, Madeleine Delpierre, Renée Davray-Piékokolek and Pascale Gorguet-Ballesteros 1996 *Le costume français.* Paris: Flammarion.
- Thiers, Jean Baptiste 1690 *Histoire des perruques. Où l'on fait voir leur origine, leur usage, leur forme,*

- l'abus & l'irrégularité de celles des ecclésiastiques.* Paris: Aux dépens de l'auteur (自費出版) .
- Vallot, Antoine, Antoine d'Aquin, Guy-Crescent Fagon 1862 *Journal de la santé du roi Louis XIV de l'année 1647 à l'année 1711.* Paris: Auguste Durand.
- Vonglis, Bernard 2006 *La monarchie absolue française : Définition, datation, analyse d'un régime politique controversé.* Paris: L'Harmattan.

### インターネット資料

- ウィクショナリーフランス語版「lampion」  
<https://fr.wiktionary.org/wiki/lampion> 2022年7月9日閲覧。

(2022年12月15日受理)

## Men's Wigs and Hats in France during the Absolute Monarchy

Dai Hirano

### Keywords

Absolute Monarchy, Louis XIV, Louis XVI, Wig, Hat

This paper examines the state of men's wigs and hats in France during the absolute monarchy. During the absolute monarchy of Louis XIV to Louis XVI, the styles of men's wigs and hats changed over time. This paper will clarify these changes in the context of the social and political situation in France.

First, I will examine the period of absolute monarchy itself, because the periodization of this regime is fraught with problems, and it is necessary to define its implications for this paper. Next, I will consider the spread and development of the wig in France. In France, the use of wigs began to spread during the reign of Louis XIII and developed during the reign of Louis XIV. I will trace this process and examine the meaning and the role of the wig, and touch on the hair powder used to colour the hair of the upper classes at that time. Wig-wearing and the popularity of hair powder also influenced the style of hats, in particular the tricorns that appeared under these influences. Tricorns were often held under one's arm when wearing a wig. Finally, I will examine the hats of Louis XVI's reign with reference to the modal print books that were a medium for the fashion of the time.

This study makes clear that during the reign of Louis XIV, the wig began to take on meaning as a symbol of authority. However, in the reign of Louis XVI, hat styles began to diversify. This paper thus explores the relationship between men's wigs and hats during the absolute monarchy and examines their place in the changing regime. This paper examines the state of men's wigs and hats in France during the absolute monarchy. During the absolute monarchy of Louis XIV to Louis XVI, the styles of men's wigs and hats changed over time. This paper will clarify these changes in the context of the social and political situation in France.